

トラック 210

レユニオンの圏谷 Cilaos 在住の夫妻

I: 聴き手

A: 妻

B: 夫

I: [我々は] 物語を集めているところで、例えば大悪魔などの話などを。

A: 物語なら昔からあった。

I: 昔からって、いつのこと？

B: と言っても、「大悪魔」のことはあまり知らない。

I: いや、「大悪魔」じゃなくて他のもの、「赤ずきん」みたいな話。小さい頃に両親はどういうものを話ししてくれたのか。

A: だからあまり知らない。

I: 夜になったら、どういうことを話していたのか？

B: 昔の生活は今よりもっと単純だったし、楽だった。戦争の頃はひどかったけど。

I: 戦争というと...

A: 39年の。

B: 39年。

A: 「大悪魔」の話は知らないようだね。

I: でもチジャンは？

B: チジャンは知っていた。

I: チジャンと呼ばれていた？ チジャンの物語。チバニエではなかった？

A: 話は「大悪魔」のもの。

I: それじゃ、チジャンの話は知らないことになる。

A: 「大悪魔」の話を持ち帰ってもらえばいい。

B：悪魔というのは、神様がいて．．．毎日のお祈り，両親が教えてくれたカトリックのお祈りの中に出てくる。

I：でも，夜に子供たちが家に入るように，子供たちにする話は？

B：私たちはそのように信じ込まされていた。

I：子供がひどく泣いたら，悪魔がつかまえてさらっていく，とか？

A：むしろ，それは狼だった。

I：カル婆さん？，狼？

A：狼。カル婆さん，そう。

B：カル婆さんだと信じ込んでいた。

I：それで，カル婆さんはここでは何者？ 女？ どのようなもの？

B：カル婆さんについてそれほど知っているわけではない。肖像画があったぐらい。

I：肖像画？

B：よく知らないけれど．．．肖像画だ。

I：それで，カル婆さんが鳴くのを聞いたことある？

B：まさか。

I：いや，というのも，私が小さい頃，カル婆さんが真夜中に出てきて，時々鳴くのが聞こえたと言われていた。勿論何かの鳥だけれど。それがカル婆さんだと信じていた。それで子供はみんな家の中に戻る。

B：家の中に，そう。昔々，今ではもう聞こえないけれど，昔は鳥が辺りにいた．．．

A：どういう風に鳴く？

B：「トゥ」，「トゥ」

A：多分，それがカル婆さん？

B：それが聞こえたら毛布を引っ被っていた，怖かったんだろう。でもそれを聞いた時は鳥だと言っていたけれど。

I：サン・ポールではそれを「トゥー鳥」と言っている。それは「ウー」と鳴く

鳥で、「ウー、ウー」という感じで鳴く。サン・ポールでは「トゥー鳥」と呼んでいて、それがカル婆さんのこと。でも結局それはミズナギトリという鳥に違いない。ここでは他の人たちはミズナギトリのことを知っている？

B：勿論知っている。

A：でも今はもう聞いたことがない。今でもいるのか？

I：いる。ミズナギトリというのは、灯りを消す鳥と言われている。

A：それは、サイクロンが来た時とか？

I：その通り。

A：でも今ではミズナギトリはもういなくなった。リリアヌはカル婆さんの話を知っていたかい。若い人に少し話してあげないと。でも、ミズナギトリが「ウー」と鳴くのを聞いたら、雨とサイクロンが来る。

B：昔はその鳥たちがそこいらを飛んでいたけれど、もう聞かなくなった。

A：もういなくなった。今いるのはモーリシャス・ツグミ。

B：そう、モーリシャス・ツグミという小さなツグミだ。

I：赤い鳥で果物は何でも食べてしまう。灯りに引き寄せられるみたい。

A：灯りに引き寄せられる、そう。

I：でも、カル婆さんの話はしてくれなかった？

A：リリアヌと私は一緒に暮らしていたけれど、カル婆さんの話はしなかった。

I：おやおや、あなたを怖がらせなかったんだ。

A：いや、彼女は話さなかったけれど、両親は我々子供たちを怖がらせた。彼らは、暗くなったら外に出ないように、お化けがいるから、と言っていた。

I：私はどんな風に怖がらせたのか聞きたい。ミズナギトリの真似は「ウー」？

B：ミズナギトリかどうかわからないけれど、昔はたくさんいたよ。他の鳥はそんなに多くなくて、それだけだった。他の鳥が灯りを見たら地面に降りてきていた。

I：それは今だとバローのミズナギトリと呼ばれているもので、我々クレオル

は単にミズナギトリと言っている。

B：まだここにはいるよ。

I：平地に住んでいる我々は、ミズナギトリが「ウー、ウー」と鳴いたら、それは誰かが亡くなると言っている。つまり、それはまさに死ぬ人がいるという先触れ、予告のようなものというわけだ。

A：もしくは、悪天候、荒天のね。

I：へー、悪天候のことは知らなかった、でもそれって．．．。

A：それはつまり、雨を告げるということ。天気が荒れるということで、実際にそうだった。

I：実際にそうだったということは、気圧計のようなものだったわけだ。

A：そんなもの全然なかったしね。今の天気予報もなかった。

B：気圧計を見て、それが下がると天気が悪くなって、上がるといい天気になった。

I：気圧計はどこにあった？ 町にあった？

B：町にあったよ。

A：役場に？

B：その頃はなかったね。

I：自分たちの家にあったのかな？ ところで他の物語のことは知らない？ 小さい頃。

B：物語．．．昔の暮らしも今とそう変わらない。

I：それもそうか、今でも同じということ。

B：昔、生活するのに10センチもあればよかった。戦争の頃は耐乏生活だったね。

I：戦争の頃、ここはどうだった？

B：戦争の頃、何もなかった。店には何もなかった。すべてが配給切符で、稼ぎは全然なかった。パタトゥ [イモ] を食べていたけど、見つけれればの話で、あとはマニオクのかけらぐらい。47年の頃は生活が大変だった。

I: 47年, 46年頃。それから48年のサイクロンの時はここはどうだった? あちこちで洪水になった?

B: 48年は洪水だったね。

I: 彼女 [妻] の生まれはいつ?

A: 39年。

I: それじゃ48年のころは知っていることになる。あちこちで洪水になった, 町でも?

B: 家には7人いた。パパと子供が4人, 彼のママと兄弟がひとり。家は全部土砂に埋まってしまった。

I: それはボアンザの家のこと?

A: そう。

I: なるほど, 彼が私に話してくれたことがある。彼が小さな妹を木の下で見つけたという話, どこだか知らないけれど。

B: 妹は生後15日だったと思う。

I: 15日?

A: ひょっとしたら8日だったかも。

B: 8日... 次男坊が走って... 走って... アルフォンス・バロー通りまで。サイクロンが家をつぶした時, みんな走った。小さな子供達はその子を温めて救おうとした。生まれてたった8日だったからね。

I: そのサイクロンは風や雨がすごかった? それとも雨だけのサイクロン?

B: 風だったね。

A: でも雨も降った。

B: 雨がすごかった。

A: 我々は下の部屋にいて助かった。赤十字はいたけれど民生委員はいなかった。昔はそういう風には呼んでいなかったけれど, 赤十字だった。そういう風に思っていた。私の妹のモニックは47年に生まれていたもので48年のサイクロンの時にはいた。赤十字がモニックを助けた... でも彼女がどこにいたのか

わからなかった。モニックは二番目の部屋にいたんだ。暗くなってから、砂糖水を彼女に飲ませてあげた。食べるものがなかったから。

B：ヘリコプターが飛んでいたよ。

A：でも、その頃はヘリコプターなんてなかったので、飛行機だった。あちこちに物資を落としていた。

I：みんなそういう風に離ればなれだった？

A：みんな離ればなれで、物資をそれぞれ分けていた。

B：それで、物資を手に入れた人も他人の分を奪っていた。おかげで他の人たちの分は少なくなったけれどね。

I：分け合わなかったということ？

A：分け合ったけれど何しろ少なかった。

B：42年、48年とみんな悲惨な生活を送っていた。みんな配給切符だった。布も店にはなかった。

I：キャティの家で、キャティの両親も布がなかった。

B：その頃はなかったんだ。布があれば、2,3メートルだけでもそれを店に置いて、行列が出来たよ。でも[買う]人が多すぎて3日間も行列が続いた。何とも惨めだった。無駄づかいだ。

I：ところで、ラング・キューイ=キューイの話聞いたことは？ チジャンの話のようなもので、小さな男の子が最後に悪魔をだますという話。つかまるのが彼ではなくて、パパの方が悪魔に食べられてしまうという話で、イレット・デ・コルドの地元の人たちから聞いたことがある。

B：聞いたことはない。

I：話を録音しに来る必要があるけど、することが多いのでは。今、何歳？

B：86歳。

A：87歳でしょう？

I：あー、そうだったか。

B：少しは覚えているけれど、ほんのちょっとだけだ。

I: それでも、話をしているうちに記憶が戻ってくることもあるので。

B: 若い頃は悲惨な生活だった。今みたいに時間はなかった。

I: 当時は裸足で歩いていた？ 靴はあった？

B: 靴だよ、それを抱えてミサに行った。手に持ってね。履くと死ぬほど痛かった。

A: 一足だけ。

B: そう一足だけ。履くと...

A: 雨になった。